

# 【資料紹介】 水野家奥女中かもりの手紙

翻刻・解題 畑 尚子\*

凡例	目次
翻刻	
解題	

## 凡例

ここに紹介する史料は、水野家奥女中かもりの手紙で、横半帳一冊である。〔資料番号96201445〕

1 史料の註および解題は、末尾に付した。

2 文中に適宜、読点（、）および並列点（・）を加えた。

3 漢字は、現行の当用漢字・常用漢字があるものは、原則としてこれを用いた。

4 宛字・誤字・衍字はそのまま表記し、正しい文字がわかる場合は、右傍に（○○）と記した。ただし拘は酌とした。

5 変体仮名は通常の平仮名に改めた。ただし而は活字を小さくして残し、異体の漢字ホは等とし、ニハミはそのままにした。

6 合字は平仮名に改めた。

7 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」を用い、

大返しは「く」を用いた。

8 猶書は本文の後部にまとめず、史料の順とした。

## 翻刻

表紙「京都御上洛御供の節文之うつし」

## 1

猶々昨春とちかい京大坂とも甚静にて御所にて

公方様御上洛を御よろこひ被遊候よし、<sup>1)</sup> ます二く恐悦と存上  
まいらせ候、御ことすミニて三月ハ御かへりをいのりまいらせ  
候、めで度かしく

<sup>2)</sup> 初春の御寿松竹の千代万代と御いわひ申尽しかたく候

殿様

若殿様<sup>3)</sup>

方々様 ますく御機嫌よく御重歳被遊恐悦御伺候御事ニ存上

\*当館学芸員

いらせ候、御まへ様・富山さま・おか代はしめ皆々御揃めてたく  
春を御むかへ被成候御事、是又めて度存上まいらせ候、吉野殿へ  
も同様御祝聲申つたへ被下候

一殿様御事、昨十二月廿七日八ツ半時頃

公方様御供にて翔鶴丸と申御船へ御のりこみ被遊、その夜ハ品川  
沖に御とまり被遊、よく廿八日朝五ツ時ころより御出帆、浦賀ミ  
なとへ四ツ時御着せん

公方様御供にて 御上陸、こんばんは風よろしからず候ま、浦賀  
へ御とまり相成、東浦賀御順見 御台場御鉄ほう御上覧被遊、廿  
九日五ツ時御出帆にて伊豆下田へ御着船、御上陸龍泉寺にて御  
支度之所、鳳福寺と申寺にて御ひる召上られ処、大風にて御見合  
二相成、同所鳳福寺と申寺にて御とまりに相成まいらせ候、よく  
元日夕ほう福寺にて御屠蘇御雑煮着土候よし、夕こく御乗舟、よ  
く二日御出帆大風にて御舟之うへを波こし候よし、御昼御膳召上  
られ御雑煮は今朝もさしあけ、下田より六りさき小浦と申ミなど  
へ御船をいれ候、此間の大波申やうもこれなくよし、御舟の御  
方々様のうちにはもどし候人々も多是有候へとも

殿様ニは何之御事も不被為入、雄依よりはり候へ共先無事ニ御供仕  
候よし、今日兩度地引網 御上らん、いな・黒だいで数万引あけ  
あみよりとひ上り候いな御舟へ飛込候、誠に目をおとろかし候よ  
し、御供舟へも沢山ニ被下ニ相成、三日小浦と申所へ御上陸中宿  
五郎兵衛宅御とまりに相成、四日御船ニ被為召正四ツ時御出はん、  
音に聞えし遠州七十五りの灘鳥羽より五り先の矢湊へ夜五ツ時過

御着舟被遊、何之御さわりも不被為有恐悦御事ニ存上まいらせ候、  
五日紀州の大嶋へ御着、八ツ時頃串本村矢倉甚兵衛と申もの、宅  
へ御同役様御一所ニ御泊被遊候、六日五ツ時過

殿様御先へ御乗船、紀州由良湊へ七ツ時頃御付被遊、今日ハ風あ  
しく候ま、此所へ御碇泊、七日風あしく候二つき紀州由良河戸村  
庄屋文右衛門宅にて御昼召上られ、同人よりみかん一かこ献上、  
そのミかん今日頂戴いたし候、風味別段にあまみみのことく、  
江戸まはりとはちがい木にてじゆくし候もの故、誠に別段御まへ  
様方へも上申度候、八日六ツ時頃御出帆、御昼前大坂天保山沖へ  
御着、今日ことこの外の天気にて風すこしもなく四方山々霞、江戸  
の三月くらいのようにのどかにて誠ニく恐悦ニ御座候、暮合川  
舟ニ大坂びぜん嶋へ御上りより御登 城、御旅館ハあみ嶋米や  
平右衛門と申者の別荘にて、東ハイこま山・かつらき山河内の  
村々一目ニミへ、まへハ淀川つ、ミに桜沢山にて大坂第一ばん所  
にて江戸の向島と申所ニ御座候、五ツ時頃御退出にて御目見へ御  
座候処、何之御障りもあらせられず、御膳もよく召上られ御酒も  
いつものようニめし上られ彦右衛門・七左衛門もめし御話被遊、  
誠に御さえくしく被為入候て大安心難有く存上まいらせ候、実  
ば御立日御のとけにあらせられ候よし、何共御さた無御立ニ相成  
候処、御舟中一夜にて御なをり被遊、それより今日まで何之御事  
もあらせられずとの御沙汰にて安心難有存上まいらせ候、舟中ニ  
て虫に御さ、れ被遊御ひだりの御手のこう御はれ被遊候、舟の木  
よりわく虫にておかにてハ是なきよし、全く御かき被遊候御かふ

〔2〕

れゆゑ御あんし申上候程の御事には御座無候、昨ばんハ御しつまり被遊、御めさめ六ツ半時過ニて御きけんよく 御登 城被遊候、御便り出候ま、あらく申上まいらせ候、此段

若殿様 亮寿院様へ被仰上候やう願上まいらせ候、紀州玉井ミそうらがのあめ御もちこし被遊、近江のさぎしらすを御なまくさに御そへ被進候ま、よろしく御ひろう願上まいらせ候、めて度かし

く  
正月九日出

千よ山さま

かもり

正月十六日夕七ツ半時着

猶々おくのへの被下二百疋一両日にハ相たし申候、づいふん丈夫のよしニおハしまし候、此段も仰上られ被下候  
餘寒甚たしく存上まいらせ候処

殿様

若殿様

方々様 益御機嫌よく御座被遊恐悦至極存上奉まいらせ候、御両人さまニもいよ／＼御いさましく御勤被成万々めてたく存上まいらせ候

殿様御事、一昨十日八ツ半時頃淀川御座舟へ御めし被遊、御供のりこミ彦右衛門・七左衛門・蟹守<sup>12)</sup>・雄依・平学・仲・亦三郎其外

御小性二人周伯奥坊主<sup>13)</sup>、右之通、尤雨天ニ付暖気ニ而一とうよろこひまいらせ候

上の被為入候処、三畳しき御次の間四畳たらずニ、十人おしこミおかしき御事ニ御座候、夕方より一献召上候処、御酒いれ候事行ちがい彦右衛門・周伯実ニあおく相成まいらせ候

上ニはのまずともと御さた御座候へ共何とも恐入、実ハ雄依・仲などかれこれ御せわ仕候ま、わたくしかれ是申候てもきあいもよろしからず、其日ハうちまかせて町奉行様へ御使に出候間、さためてまかり有の心得の処、外の御供船へつミこみまいらせ候よし、種々心配の折から平学舟頭之のミ料見つけだし、凡二升はかりのたる持来おの／＼ひやにて御心見致候所、けつこう／＼と大にいきおい出、夫より御つゆ物雄依御にたていたし、鴨・せり・うど・くわい・ふなどの御なべ出来、御重つめ田沼様より御進られ之御品一重、いり鳥例之ごほうこふやく、鴨一重ハ御口取物、瀬物の御重ハ御手まへにて被仰付候、御品御取ひらきにて

上ニハ御こゝとも無召上り候所かんと致候へハ、甚のあく酒にてかほおしかめ／＼一とう頂戴仕候、皆々おかしき御はなしなどにて御にき／＼しく、夫より御膳よく召上られ皆々もさ、おり弁当いただき、周伯御そばね仕候、よく御快しん被遊、夜あけごろ淀と申所まで参り五ツ時まへ伏見御ほんじん大塚と申宿へ御付被遊、御膳召上けられ候、折からよき酒参り彦右衛門初大頂戴ことの外御にぎやかにてわたくしも近來の大よい仕候、夫より本かいどう御上京伏見御上は御けんふん、伏見町奉行宅へ御立寄稲荷か

んぬし方御見ふん、すくニ会津様へ被為人、夫より一橋様へ御出、  
 よる九ツ時目出度御かへり被遊、油小路六角西へ入所亀屋と申御  
 用たつの内にて御居間十畳二間御すわりも出来赤白の御ちん松  
 の立木をしんに致多ひなどのかさり江戸のよりハ見事ニ出来、御  
 くいづミ御雑煮も上り、一橋様鴨一羽、亀と申御酒一たる被進、  
 誠ニ御めて度、乍去御着御当日より九ツ時迄も御か、り被遊  
 恐入候御事ニ御座候、今日も朝より御役人様立かわり御逢ニ被為  
 入候

御書御認被遊候間合も有らせず、九ツ時御供揃にて関白様御は  
 しめ議奏伝奏へ御着の御ふいちやうニ入らせられ候、御狩衣御さ  
 しぬきにていらせられ、ことの外御えもんつきよく皆さまニ御は  
 いけん申させ度存候

一 亮寿院様よりの御書、十日舟へ当着、ますく御きけんよく  
 若殿様

方々様 めてたく若葉のはるを御むかへあそハし御祝義も御家例  
 の通りすまさせられ、ますく御機嫌よろしく万々恐悦御事ニ存  
 まいらせ候、そのま、

上へ御覧ニ入候所、この通り御機嫌よろしきおもき私よりまつ申  
 上候やうニと仰付られ候

亮寿院様神仏御きねん御印にて誠ニ御丈夫ニ被為人、御船も御  
 と、こほりなくなから舟にて春を御むかへ被遊、宝福寺と申所ニ  
 て御そうに御祝被遊、万々年元御めて度御安心被遊候様御申上被  
 進候、さいわい彦右衛門をり候ま、御書そへの御事申さけ候処、

恐入難有しあわせニよろしく申上候やう申聞候、わたくしへも御  
 沙汰をこうむり恐入御めくミにてよるもあ、たかに打ふし、実に  
 御高おん難有存上まいらせ候、いつれめて度御供仕まかりかへり  
 候へハ御にきくしく御前にて御酒頂戴仕候、かつく御物語た  
 のシミまいらせ候、昨今のあらましを申上候、御まへさま方にて  
 御るすゆゑさそく御心配の御事御さつし申上まいらせ候、すい  
 ぶん御身御大事に御つとめ被成、御めて度御かへりを御待被成候  
 様存上まいらせ候、あらくめて度かしく

正月十二日

返々おか代はしめへもよろしく御つたへ願上まいらせ候、かし  
 こ

[3]

余寒ことの外ニおはしまし候処

殿様

若殿様

方々様 益々御機嫌よく御座被遊恐悦至極ニ存上まいらせ候、御  
 まへ様ニもいよく御勇しく御勤被成候、万々御めて度存上候、

殿様御事ことの外御丈夫にて日々御いそかしく御勤被遊、十四日

ニは

公方様御迎にて九ツ時御出、折あしく小雨にて候へ共、九條村と  
 申所より御歩行にて跡部様ニ御逢被遊御機嫌よく被為人候よし、

その夜跡部様にて伺まいらせ候、私事ハ足にあかきれふミきり御  
供御めん相願まいらせ候、十五日昼頃

公方様御供にて御城へ御着被遊候、御通りずし拝見の人々おび  
た、しく候、よく十六日ちよくし御座にて、白木の御こし御拝領  
被遊、是ハ白木の御かごニ御座候、此度ハ去年とちかい、御とり  
あつかいもちがい恐悦の御事ニおはしました候、され共 殿様ニハ  
いろ／＼御心配被遊候御様子ニ御座候、此方様などへも去年ハ御  
到来物もこれなく諸大名まいらす候よしうけ給はり候ところ、此  
度ハ日々御大名御逢ニ入らせられ御悦、御進物等も日々御座候、  
その方様にて御菓子なども御すくなくと存被進候やう申上おき候  
ま、よき御便りおはしました候ハ、差上申べく候、此地ハそこび  
へ致候、御泊ニは紙帳よろしからんとこんばんより紙ちよう御用  
い被遊候、大ニあた、かにと申事にて安心仕候、二百畳しきの所  
へ御屏風しきりニ御しづまり被遊候御事のよし

一花沢瀉代(御カ)も(御カ)本雄依(おより)わすれ候よしニ付、早々御のほせ可被下候  
一毛(へ)きらず(ヒ)ひろ(ロ)うと御帯の御注文これ有候よう存候所、雄依うけ給  
りもうさすと申候ま、これもいなや御申こし可被下候  
正月廿日認メ 二月四日来ル

千代山様

かもり

殿様

若殿様 方々様 益々御機嫌よく御同前ニ恐悦しこく存上まいら  
せ候、御まへ様ニもいよく御かはらせなく御勤被成候、めてた  
くそんし上まいらせ候、下田之御便り付くわしく御承知被成候よ  
し、今日文認メ候処、御便り付御ようすも伺御うれしく存上まい  
らせ候、私道中雪の事御あんし被下候よし、ま事ニく御深切さ  
ま有難、富山殿御はしめ御ほうの御事と有かたく存上まいらせ候、  
まつく無事ニくらしをり候ま、御心やすく思しめし被下候よう  
願上まいらせ候、されば何の御用ニもた、す恐入まいらせ候、と  
ひ入ゆへ心におもひまいらせ候ても十分ニハ御奉公もてきかね恐  
入存上まいらせ候

一 亮寿院様より御書可被進候処、御めんとうニも被為入候ハんとわ  
たくしより御機嫌(ごきげん)けん伺候ようとの御事、早そく申上まいらせ候、  
猶よろしく申上候やう御さたニ御さ候

一 御まへ様御はしめ年始の御しうきこれまた申上まいらせ候

一 御子様へ御とし玉被進候御礼申上候

一 明日は初御さんだい、此度ハ二條 御城より御行列のよし、さ  
そく御りつはの御事と存上まいらせ候、今日ハ雨ふり候へ共明  
日ハ天氣をいのりまいらせ候

一 さくばんハ御とまりニ候へ共、とかく早々御めさめにて御こまり  
被遊候よし、御さたにて誠ニ御くろふの御事恐入存上まいらせ候、  
何を申も男手はかりにて御なんぎの御事と存上まいらせ候、され  
ど御風一ツ御ひきあそはされす有難存上まいらせ候、まつあ

〔4〕

一九日出にて御文十九日ニ相たつし拝見致まいらせ候

らくめて度かしく

かへすく御いと被成候、おか代初へよろしく御申つたへ願

上まいらせ候、以上

千代山様

かもり

二月四日来ル

【5】

かへすくよかんせつかく御大事ニ御いと被成まいらせ候、

いのりまいらせ候、かしこ

兎かく余かんつよくおはしまし候処、いよく御勇ましく御勤被成御めて度存上まいらせ候、此地は昨日まで日々雪ふりそこひえ致こまりまいらせ候

殿様昨日夜も御泊りさそく御寒く被為入候御事と御あんし申上候へ共、ことの外御丈夫にて日々御勤被遊、昨日は中川客様へ被為入、八ツ時過御帰、御逢客様

春嶽様<sup>23)</sup>・有馬様<sup>24)</sup>・伊達様<sup>25)</sup>御いん居様にて候、客様は御ひふをめし御えほしもなく誠ニ御うちとけの御様子御酌<sup>26)</sup>などあそハシ

上ニも御酌にて御酒御さし上被遊候よし大きニ御よひ被遊候よし、よく日御はなし被遊候、誠ニく恐悦の御事にて

上をば御したい被遊候御事そんし上まいらせ候、明日は又々

御参内<sup>27)</sup>にて御帰よにいり可申候、扱々御いそかしき御事恐入候へとも御風一ツめされす候ま、御あんしなさるへく候やうミ

なくへもつたへ被下候、とかく御料理御意ニ入申さす度々御さ

た有之候には恐入、せめて御料理なりとも御意ニかない候ようつかまつりたく候へ共、私の手ぎわにてゆきと、きかね源治のようにはまあり不申、雄依も色々致まいらせ候ま、まつうちまかせおきまいらせ候、色々さし上度物もたんと御座候へ共飛脚<sup>28)</sup>にては大そうのうんちんゆへいたしかたなく、御菓子ハ近日被進候よう相願置候、先ハ一兩日之御ようすあらく申上まいらせ候、此よし吉野殿へも御つうし願上まいらせ候、あらくかしこ

正月廿六日

かへすくよかんせつかく御大事御いと被成へく候、いのり

まいらせ候、かしこ

千代山様

かもりより

正月廿八日出 二月五日来ル

【6】

一昨夜御参内是あり、夜る九ツ半時頃御帰りニ相成てさてく恐入候御事ニ御座候、され共御丈夫ニあらせ候御事有難存上まいらせ候

一何そ御このミの御品あらせられ候へハ

若殿様御はしめ

於錦様<sup>29)</sup> 亮寿院様へ御うか、ひ被成御申上被成へく候ようとの御沙太<sup>30)</sup>ニ御座候、左様御承知被成るへく候、御まへ様御初も何か御

願被成候かた御きけんとそんしまいらせ候

一江戸より便りとをくよし御沙太<sup>（孫）</sup>二御座候間、表へ御せかミ被成あまり御とをくしく相ならぬよう御文御つかはし被成へく候、此段青山へも御申上可被下候、此いせんとちかいにておたやかに御座候ま、奥のたよりを御まち被遊候かと存上まいらせ候

一殿様御このみの御品御まハし被成度よし、御小納戸より申上候へ共、先何も御このみハこれなきよし二御座候、たいていの物ハ此かたニ御さ候、のりもさけもいまた御座候

一御伺の御事御まへ様よりわたくしかたへ御申こしのかた御よろしくと存上まいらせ候、まづは今朝御沙太<sup>（孫）</sup>おもむき申上まいらせ候、かしこ

千代山様

正月廿九日出 二月五日来ル

かもり

【7】

一漸春の色に相成候処

若殿様

御方々様益御機嫌よく御座被遊恐悦至極存上まいらせ候、然ても此地いたつて御せいひつ、昨年とハもようも大きによりしく、日々のおよう御公家へ御出にて御ちそうニ御なり被遊御酒御よんところなくめしあけられ、夜ふんも京都ハすべておそく御なり被遊、日々御休息<sup>（きゅうし）</sup>是なくさりなから大丈夫ニいらせられ候ま、かなら

すく御あんしくよう存上候、御舟中より此度ハ御酒めし上

れ、京地ニても御同様ゆゑ御酒よ程御上被遊候、さりながら江戸のときあしき御酒にてハめしあかられす候ま、御帰り被遊候てハもとのことくにやめあそはす思召ニ候へ共、た、今よりはわかりあそはされず、すてに明日も東本願寺<sup>（ひがしほんがんじ）</sup>へ御なり御供ニ候間、さためし御ちそうがてるであろふと思召候ま、御酒もめし上りよき御機嫌にて御かえへり被遊候と思しめし候、今日ハめつらしくおはやく七ツ半時過御帰りあそハし、すくニ御膳をめし上られ御酒もめしあがり候うち、この手かみをした、め候ようニ仰付られ候、燈下<sup>（とうか）</sup>らんひつなから申進候、かしこ

二月十一日

かへすくめて度かしこ、よりかしこく

千代山様

かもり

【8】

一余寒つよくおはしまし候処

殿様

若殿様 方々様 ますく御機嫌よく御座被遊御同前ニ恐悦至極御よろしく存上まいらせ候、次ニ御まへ様御はしめ御勇しく御勤被成候万々御めてたく存上まいらせ候、二月廿六日御さし出の御文、今六日着仕拜見致まいらせ候、其御地も十七日大雪にてとかく天気まれニおはしまし候よし、こ、元もとかく天気あしく山近

き土地ゆへ、はれるかとおもへハたちまちくもり雪ちらつき漸  
 四日の日一日めつらしく天気にて春のようニこれあり、其よく日  
 雨に成こまりまいらせ候、扱

殿様ニも日夜御精勤あそハし恐入存上まいらせ候、去る廿七日二  
 度め御参内にて五ツ時御先へ御出可被遊処、何か御用出来

公方様は四ツ時過施薬院(是ハ御所前にて御ひかへ所也「割書」)  
 御出被遊 殿様・一橋様と御一しよニ九ツ時頃御出被遊、夜の九  
 ツ時御かへりニ相成まいらせ候、御苦勞遊ハし候へ共、此度は

公方様右大臣に御成被遊御くらはは従一位に御上り被遊、御所も  
 市中も御いこう満々、おだやかにて御つとめかいは有難有御事ニ  
 御座候、御泊番ニハ御こまり遊し候御事とそんし上まいらせ候、

御城二百畳敷の所へ屏風かこいにて御やすミ被遊候御事ゆへ、御  
 寒く入らせられ候二つき、紙帳御かい上相成 幸よきしちやう是  
 有、江戸のとちかいにしの内のやうなるかみにて六畳敷ほとんし  
 ちうにて、おなんどの衣のしづをつけさせ御枕もとにまどをあけ  
 けしからずあつたかに御座候、ごふだん御旅宿にても御用被遊候、  
 さりながら御しんのせつも周伯御小姓などおた、きを致、男手の  
 ぶこつ、拝見致候もむさくるしく、さてく夫のミハ奥そだちのわ  
 たくしゆゑ甚見くるしくさそ御いやにおほし召候御事と存上候  
 御上御かんへんつよきゆへ諸事何之御さたもこれ無候へ共、何事  
 も奥とちがい大ざつはにて恐入候

御上は御風一ツ召させられす御夕ニハ七左衛門・幾右衛門・私初  
 御側にて御酒被下御にきくしくいた、き候へ共、町近き所故御

こたいも十分ニは御出きあそばさす、女けなくわたくしさへおも  
 しろからず候間

御上にハさそくと存上候、召上り物もずいふん召上り御酒も江  
 戸よりハ多召上り、夜中の御寝もよろしく御枕つけさせられ候へ  
 ハすぐに御いびきいて申候、全く御いそかしきゆへの御事と存上  
 候、たゞ虫のいたらき候あと御手の甲おやゆひ御かゆミとれ不申、  
 御いし御毒だて申上候へとも御用なく、御舟中より只今迄鳥うを  
 とも御十分ニ召上り候ま、少々御とくのこり候かと存上まいら  
 せ候、さりながら御毒だてなく御直り被遊候御事ゆへかへつて御  
 よろしくと存上まいらせ候、右之通りの御様子ニあらせられ候  
 ま、かならず御あんし被進ぬよう

大方様へも御申上被下候、朝夕御そバははなれ不申候へとも、下  
 宿菅里半はかり有之御いびきをうか、ひ退出仕候程遠くこまりまい  
 らせ候、雄依ハ御本陣役所ニ畳敷ニふしまいらせ候、せまく候  
 ま、二人にてハせまく候ま、わたくしハ下宿へ引取まいらせ候  
 大方様より仰をこうをむり恐入有かたく存上まいらせ候、猶よろ  
 しく被仰上被下候様願上まいらせ候、必々御あんし被遊ぬやう  
 仰上られ可被下候、昨年とハ大ちがいの御様子ニ御座候、私共安  
 心仕候

一 此度御雛一对官女三人

御式方様へ御もやいニ被進候、此内理男のかた直衣と申御服にて  
 桜ののをしと申候本式の御装束ニ御座候、御袴は浮紋のさしぬき  
 是も本式ニ出来をり候、御日出度御装束ニおはしまし候、女のか



たは大すべらかしニかんさしの様なるものハ釵子<sup>28)</sup>と申今のかんさしニ御さ候、御服<sup>はく</sup>ハうちきと申おりものにて、袴<sup>はかま</sup>ハひのはかま五ツ衣<sup>きぬ</sup>と申を下二めし候、是も本式ニをり候を御えらひ被遊、只今京都にて一二をあらそふ伊藤と申細<sup>さいく</sup>工人より御買上<sup>かひ</sup>ニ御さ候

一 此くわん女三人甚顔よろしく候ま、此とをりの御側女人御るすちうに三人御めしか、へおき可被成候様思召候、此間阿州<sup>あしゅう</sup>様徳大<sup>とくだ</sup>寺様と申御公家様へ御客ニいらせられ候処、御中老ニよき女是有御意<sup>い</sup>ニ入候二付、一間のうちへ御引つれ御談<sup>だん</sup>有之候処、承知致さず大はたきのよし御城にてひようばんこれありと

御上ニて御はなし被遊、永く女なき御旅<sup>りよ</sup>ちう御尤の御事ニおはしまし候、さりながら不承知<sup>くわいふん</sup>にて外聞<sup>くわいふん</sup>かた／＼御きのどくと大わらい致まいらせ候

一 若殿様御様くわしく被仰上御悦被遊、御手さいくの御たこさそく御なくさみと存上まいらせ候

一 堀<sup>ほり</sup>様奥方様より被仰被進候儀申上候、猶又よろしく被仰被下候、以上

一 大方様よりの御書入御覽候、御よろこひ御安心被遊候、をり／＼ハ御書被進候かた御なくさみニも可相成そんし上まいらせ候、とかく江戸の御便り御き、被遊たく御様子ニ御座候、此度ハ御細々との御文両度御覽被遊候

一 大方様は上かたの事御存あそハし候ま、何そめつらしき事申上度候へとも、さして何もめつらしきものハこれなく、女の髪ふうもむかしとハ大ふんかはりおんなのきもの紋大きく、中年くらゐ

までハとび色の紋<sup>もん</sup>付はやりまいらせ候、江戸ハた、今紋小さきかいきな所にてはやり候へ共、此地は大きく御さ候、一寸も是有候よう二見まいらせ候

一 板じめ二正別段御このみ御染ニ相成

於錦様御はしめ

御三方様へ被進候ま、御勘弁被成しかるへく御めい／＼様へ被進候よう、御とり計可被下候、そのうへに別段出来合の品一疋、これハ御到来の御品ゆゑ夫も御廻し相成候ま、よろしく御取計被下候、以上

一 若殿様へ何そ被進候はつの所、江戸とちかいきうニハと、のいかね候ま、跡より御廻し相成可被申、三月三日之まにあふようと御配慮<sup>はいりよゆへ</sup>故さしいそき今日さし出しまいらせ候、まつはあら／＼申上候、かしこ

かへす／＼折角よかん御いとひ被成候よういのりまいらせ候、

岩崎・近藤へも御かしつのおもむき申聞候、よろしく可被可被

下候

千代山様

かもり

[9]

一 去月五日・八日付の御用状、二月十七日忝拜まいらせ候

殿様

若殿様

方々様 益御機嫌克御座被遊悦至御同前二恐悦奉候、御次二御まへ様いよ／＼御さかんニ御勤被成万々御めてたく存上まいらせ候、富山殿御はしめ皆々御賑々しく御留守之よし御めてたく存まいらせ候

一 御菜漬・らつきよう・御海苔・しそ・おきつたい二月十一日着仕候、御ひろう申上候御悦被遊候、早速よく日の御弁当ニ菜漬差上まいらせ候、しそづけハことに御意被入日々朝召上り候、らつきようハピンわれつゆいてまいらせ候、すぐニみりんニつけ差上まいらせ候

一 後の御便りににしき干・御ひ物・はららご早速御ひろう申上候処、是又御悦被遊候、よく朝御干物御意被入三枚めし上りにしきほしも召上り候、はららごハ御沙太次<sup>32</sup>第二差上候つもりに御さ候  
一 若殿様

御方々様御願の御品、御次之ふんも御承知ニあそハし追々御取そろへの筈に御さ候

一 大方様御帯何かよろしからふか私ニもかんがへ付不申、御ついでニもようから御色あひ御品等御内々被仰被下候よう仕度候

於錦様御長しゆばん、いたしめかまたハ無地のひちりめんか又はしほりか、そのへんの処も伺ひおき度候

一 若殿様御手細工御たこ御覽被遊御悦の御様子ニ御座候

一 正月廿八日めつらしく御天気ニて

御二方様御表御庭へ被為人候よし、こ、もともとかくしくれのよう四月いく度も雨ふりまいらせ候、そのうへ寒きつよく一昨廿一

日までハ朝夕あしのゆびひり／＼いたし候程の寒氣ニ候処、廿三日より俄に南風に相なりことの外に暖氣<sup>だんき</sup>ニてわたくしさへどうぎ一ツくらゐに御さ候

一 寒暖ふそろいの故御たれ／＼も持病にさわりまいらせ候

上にも一昨朝ハ御りうゐんにて少し御ふさきも有之、御むね御つかへ御いたミも被為有ことの外心配仕候、御下ざい御風葉被為上昼まで御養生<sup>ようじやう</sup>被遊、御昼召上り 御登 城相成候、御るす中もいか、と御あんし申上候処、その夜二条様へ被為 入九ツ時ころ御かへりかと御あんし申上候処、存外<sup>そんくわい</sup>御早く五ツ時ころ御帰りにて候候処、段々御よろしきよし御つうしも一度被為入候よし、引つゞき昨日ハ御平日のように入らせられ安心仕候、酒井様<sup>32</sup>なそハ永々御引込さく日御出きんあそハし、大和様<sup>33</sup>も御同様今日御出勤、有馬様<sup>34</sup>も二度はかり二日つ、御引込ミニ御座候へ共、

殿様ニハいまた一日も御引込無之御丈夫ニ入らせられ候御事、その御地ニて皆々心じん被成候ゆへの事と存有難存上まいらせ候

一 此度は御せんじ茶御道具かす／＼御出来被遊御なくさみニ御前へかさり付、 御登 城まへ御茶めし上られ候、右ニにつき御帰りのうへ御せんじ茶被遊候ま、ごみがかゝるの手かかゝるのと申ことけつして相ならずその段御心得被成、御側のものへも御つうし可被下候、夫ニ付此間御前ニて茶かふきいたし、もし皆はつれ候ものハ御菓子いた、く事ハならぬとの御沙太<sup>32</sup>ニてはしめまいらせ候、青山力之助ハ御酒ハいた、かす／＼菓子づきの所御茶一ツものミ<sup>甲</sup>あてず、亦三郎・仲なとあたり候に付御くわしいた、き、

力之助其外二も三三人あたらぬもの見物致のどをくびく致、大  
わらい

上二も御興きよう二入しこく御なくさみ二相成まいらせ候

一 不生箱と申もの御出来被遊猪口・ほうてう・魚ぐし・火はし・や  
つとこ・数はし・ちりかれん・金さじ・わさひおろし・徳利・御  
すいがさ・小さら一しき「器」かくの如き箱二入、それさへあれ  
ば煮にたきでき候ま、御悦被成へく候

一 御福引あらせられ候よし、御なくさみにも相成候よし御悦被遊候、  
されといつもとちかい御さひしく被為在候御事と御察さつし申上まいら  
せ候、何事二付ても御なつかしく久しく皆さまのよきにほひをか  
き不申、わきがやら何やらにほひはかりかきをりさそく

御上二も御いやにあらせられへく存上まいらせ候  
一 わなてん御帯もはや申付候よし、雄依申きけ候

一 昨日は跡部様 御登城前御出被遊、御そハにて御せんじ茶つかま  
つり差上まいらせ候、此頃ハ御持病も御よろしく御酒も御平生の  
よう二召上り、御膳も御同様二御座候ま、御あんじ被成ましく候、  
廿三日よりことの外（暖気）たんき二相成下着一ツきぬまいらせ候、ひか  
ん桜も明後日頃ハさき申へくよき時せつ二相成まいらせ候、此度  
ハ御旅宿ハ御庭広く梅も大小七八本も是有、大木のさくらもその  
外ひかん桜なども見えまいらせ候ま、花さかりは御慰二相成可  
申候、此間中ハ梅さかりに候へ共、風寒く御明おきも成かねまい  
らせ候へ共、一両日ハ西南御まハリゑんに候ま、御明被遊御覽も  
御座候、はやい御退出たいしゅのせつでんかくにても仕度申上をり候御事

二御座候

一 此度は御菓子も御廻し申上候心えに御座候

一 四条南側芝居出来役者やくしや一かうしらぬ物ばかりにて子供同前と存ま  
いらせ候、一番目ハ盛衰記せいすいき二番目重のゐづ、三番子わかれ二御座  
候よし、四五日（以前）いせんけんくわ有之二人切れ申候よし、其外儀太  
夫芝居一橋（日曜）ひよう方のものけんくわにてこわされ申候、昨ばんも  
二人きられ候よし、浪人にては無候へ共不用じん二御座候

一 御願の品々申上御承知被遊御帰りまで二そろへまいらせ候、此文  
三四日計か、り認メ候ま、其御心へにて御らんねかひまいら  
せ候、あらく申上まいらせ候、かしこ

二月廿五日

かへすく折角御目出たく御つとめ被成へく候、吉野との御は  
しめこなた御殿皆々へよく御申被下たく御願申上まいらせ  
候、以上

千代山様

かもりより

[10]

一 追々暖気相成候処

殿様

若殿様

方々様 益々御機嫌よく御座被遊恐悦存上まいらせ候、次二御ま  
へ様いよく御勇しく御勤被成万々御めてたく存上まいらせ候、

廿八日御文御細々と拝見まいらせ候、其御地も段々にきやかに相成候よし、此御地も花さかりニ相成ことの外にきはまいらせ候、久々にて嵐山花も一覽致まいらせ候

一殿様当月二日・三日頃より御むねより御かたの下かけ御いたみ被遊大心配仕候処、早そく洞海様御たのミ被遊ひるをつけからしを御つけ被遊候処、御乳のあたりしこり出来、御ちらし薬差上御薬もさし上、四五日のうち二ちりまいらせ候て、只今は何之御もようも不被為有、御酒も御膳も御平生とふりめし上られ候ま、大安心仕候、かならず御あんし被成ぬやう存上まいらせ候

一來ル六日御庭の花さき二付、田がく被下これ有善左衛門殿召されやきてハ力之助・仲兩人にてよく出来御上二ハ六十本めし上られ御飯も御三もり沢さん二召上り候

一御雛の義申上御承知あそハされ候  
一七日御参内にて

殿様御供被遊誠ニ御りつはにあらせられ候、御見せ申度候、外の殿様かたハ衣裳付あしく、紀州様などもよろしからず、御大名三十人はかりの内、御若き御方榊原様<sup>39</sup>かもん様など御うつくしく御座候へ共、外殿様ハどれも一人みられる御方ハ是なく、うちの殿様はかりにて恐乍市村之天神様のように拝見致まいらせ候  
一御帰り御程あひわかり申さす候へ共、先来月中ころには御立二も相成申へくそんなら候

一明日やわた辺<sup>八幡</sup>へ山崎御見分ニ付只今より御先番ニ罷出まいらせ候、誠ニいさゝかはかり申上まいらせ候

一俄ニ御軍かん出候ニ付御長持二棹御廻し相成まいらせ候、右之内御茶二つは御まわしニ相成候、御小納戸さし出し可申候、御受取被成候、御つかい被成候よう御さたにて長くしまいおきてハあしく相成候ま、せいでして御つかい被成へく候  
一さぎしらす・丹後ミやづか御くわしいかのふくめ被進候、先ハあらく申上まいらせ候、かしこ

三月十四日

かへすく折角時順御いとひ御勤被成御待被成へく候、とかくその御方なつかしく鼻の用心いたし候やう御申し被下候へ共、此度ハきつかいもないものハ殿様とわたくしの御馬はかりニ御座候、かしこ

【11】

一兎かく朝夕ハ寒くおはしました候処  
殿様

若殿様 方々様 益々御機嫌克御座被遊恐悦の御義ニ存上まいらせ候、次ニ御まへ様御かハリなく御いさましく御勤被成方々御めて度存上まいらせ候

殿様ニは相かはらす日々御いそもしさまニ御勤遊ハし誠ニ難有御事ニおハしました候、何事も御一人にて御引うけ遊ハし御所の御つごうも段々よろしく相成候よし、廿四日御参内  
公方様 関白様はかりにて御休息所にて御饗応御座候て

禁裏様いろ／＼御もてなし被遊御酌までも被遊女中の御きうじにて御座候よし、緋のはかまにて大きな台を持はこびいたし候様子誠にしとやかにて

公方様御かんしん被遊還御のうへ御はなし被遊候よし、其せつ御ちうたいの島台よく日

殿様御はいりよう遊ハし候

公方様ハ御酒召上らすとて御したみいて候処

天子様御酌の御酒ゆゑ御頂戴御願にて御城へ相まわり候よし、何か万事御つこう御よろしくよし、廿八日

公方様二も御同様御供御相伴被遊候

公方様
尾張様
一橋様
大和守様
雅楽頭様
殿様
若年寄様
跡部様

右之通りの御客にて品々御きようをう御座候よし、其御菓子外居

と申御ふ高の大きなるに青白赤のかいしきこの紙一枚金三分つ、のよし御沙太御座候、夫二山のごとくに御むし菓子をもりつはき

のいと花の花はし五本たち申候、又其通りの御うつわに御口とり物一重ハ魚一重ハ精進物又其外二足折おしきとて日光膳の様なる

白木のぜんに紙のかいしき一ぜんハ干菓子一膳ハむし菓子御おく

り二相成まいらせ候、江戸ならハ 方々様へ被進御まへ様初御頂戴も被成へく一目御めにかけてくざんねんニ存まいらせ候、大さ二さらにはいりきり申さす年寄衆初被下候、私共頂戴仕候難有存上まいらせ候

一殿様御骨折故、御内々三所物外ニ結構之御品御手つから御拝領被遊、又廿五日には

御短刀御つば御拝領被遊候、御つばは赤銅にて金の葵のそうかんニ御さ候

一毎朝おかた様より被進候なため差上まいらせ候、これハ人二まけず何事二も一に成候てこんのくすりのよし、なた豆と申物ハとのようにきりても一の字ニ成候よし、そのせつ水天宮の御ふうもめし上り一日もかけ不申候、夫ゆへか御丈夫にて第一の御人と成

被遊万事御つかこうよろしく難有御事ニ御座候

一若殿様昼ハ御表にて御けいこよく被遊候よし御悦被遊候、御子様方も御機嫌よくあらせられ候よし御あんしん被遊候

一十九日御田楽御もよふし御座候ところ少々御かけんあしく、廿日ニは 跡部様御出にて御田楽被進これハしこく御かけんよく六十

本はかり召上り候

一御雛内理くわん女二組此節出来申候、その外御願の品も追々と、のひ申候、なべハ当年ハ甚ふつていにてこまりまいらせ候、大津

にて出来候品にて京ニはこれ無こまりまいらせ候

一御帰りも今日か／＼と皆々御様子伺をり候へ共わかり申さす、当月中ニハ御立ニ相成へくかと被存上候

一嵐山其外花咲くんじゆ致江戸よりもにきやかのやうに御座候、二本さり多く大たふさにてさかやき多く、鉄のむちをもち引つるよ  
うな刀をさし候さむらい多く、女には多のいなし待をうた往  
来致いやな事二御座候、此せつ北かわ南かは芝居出来大入のよし、  
一昨日も夕方芝居のはね二人きられ申候、その夜中ニきおん町  
ばん人きられ申候、とかくきる事やミ申さつこまりまいらせ候、  
此地役者はしらぬ人のみにて見るきもこれなく候、雄依などもか  
け出しの通人にて芝居などはなしハでき申さす彦右衛門とのほ  
かり二候へ共日々はあい申さす、た、御まへ様かたはかり恋しく  
久しくおしろいのにほひもかき申さすわろくさき人々はかりにて  
殿様ニもさそかし御いやニ思召候御事と日々存上まいらせ候、両  
人へ御入筆つとく、申きけまいらせ候、猶よろしく申上候やう申  
まいらせ候、かしこ

四月十一日出 同廿二日当着致

千代山様

かまり

【12】

一三月十一日御認同十二日御認の文、四月四日着致候

殿様

若殿様

方々様 益御機嫌よく恐悦至極ニ存上まいらせ候、次ニ御まゑ様

かたいよく御さえくしく御勤被成万々御目出たく存上まいら

せ候、御留守御長く相成いろく御心配之段御察申あけまいらせ  
候、私事も無事に相勤罷在候ま、御きもし安くおほしめし被下候、  
下宿遠く候ま、おひはぎをきをつけ候よう御深切ニ仰被下難有存  
上まいらせ候、いつれ四ツ九ツ頃ニ帰りまいらせ候へとも御ひか  
り故か近辺何事もなく難有存上まいらせ候、此程ハ御表御庭様さ  
かりにて御花見あらせられ候よし、御慰ニならせられ候御事御悦  
ニ思しまいらせ候

一大方様御帯ハ御見合御願被遊 於錦様御長しばんも御断被遊其か  
わり御帯御戴被遊度よし申上まいらせ候

一先便御ぶづけ并ニあかかいにほひつき御上り相成不申候

一今便りよき御干物献上被成よく朝御火とりニ而召上り花付御湯も  
上り御悦被遊候、何かく御意ニかない候物申上候やう仰被下候  
へ共別ニ御好これなく候、当せつハ御肴も沢山ニ而御ふじゆうも  
御座なく候ま、わさく遠方御差上被成候ても御むたニ御さ候  
ま、かならず御心はいこれなくやう

大方様へも御申あけ被成へく候

一若殿様日々御本御はしめ御けいこ御出せい被遊候由、御悦被遊候

一大方様御ひふの御うらはかしこまりまいらせ候

一於しつ様御人形と思召之所ちかい候由、此度は数々御人形も御持  
かへり遊候ま、御意入候のを御戴被遊候様存上まいらせ候

一三月下しゆんより又々御おこり御わきはしニ御出き被遊、御はつ  
ぼうを上、此せつハ御なをり被遊候ま、御あんし被成ましく候

一兎角此方之御便りまとふニ而さそ御まちかねニ存上まいらせ候、

やうく此ころ出まいらせ候、あらくかしこ

四月十一日出 同廿二日当着致

千代山様

かもり

〔註〕

- 1) 一四代將軍徳川家茂
- 2) 水野忠精 (老中・山形藩主)
- 3) 水野忠弘 (山形藩世嗣)
- 4) 千代山 (水野家老女・奥向取締役)
- 5) 富山 (水野家老女・奥向取締役)
- 6) かよ (水野家御側)
- 7) 吉野 (水野家奥女中)
- 8) 近藤雄依 (水野家家臣)
- 9) 岩崎彦右衛門 (水野家家老)
- 10) 値賀七右衛門 (水野家家老)
- 11) 亮寿院 (忠精生母・大方様)
- 12) 村田蟹守 (水野家家臣・奥付)
- 13) 清水周伯 (水野家家臣・医師)
- 14) 田沼意尊 (若年寄・相良藩主)
- 15) 林忠交 (伏見奉行)
- 16) 松平容保 (京都守護職・会津藩主)
- 17) 一橋慶喜 (將軍後見役)
- 18) 二条斉敬 (関白)

- 19) 跡部良弼 (御側御用取次・水野忠邦弟)
- 20) 紙製の蚊帳、防寒用にもした
- 21) 水野家の家紋、表紙は水沢潟、裏紋は永楽銭
- 22) 中川宮 (朝彦親王)
- 23) 松平春嶽 (慶永・越前藩前藩主)
- 24) 有馬慶頼 (久留米藩主)
- 25) 伊達宗城 (宇和島藩前藩主)
- 26) 於錦 (忠精娘)
- 27) 西の内紙―茨城県山方町西野内を原産地とする、粗くて厚手の楮製の生漉紙
- 28) 釵子―大垂髪の頂に宝口に添えて差す
- 29) 蜂須賀齊裕 (徳島藩主)
- 30) 徳大寺公純 (右大臣)
- 31) 信濃飯田藩堀親義夫人幸 (忠邦妹)
- 32) 酒井忠績 (老中・姫路藩主)
- 33) 松平直克 (政事総裁職・川越藩主)
- 34) 有馬道純 (老中・丸岡藩主)
- 35) わな天―ビードロ織のひとつ
- 36) 林洞海 (幕府侍医・法眼)
- 37) 杉原善右衛門 (水野家家臣)
- 38) 徳川茂承 (和歌山藩主)
- 39) 榊原政敬 (高田藩主)
- 40) 井伊直憲 (彦根藩主)
- 41) 於静 (忠精娘)

解題

本史料は当館が平成八年（一九九六）に収集した「山形藩主水野忠精生母・寿女関係史料」一六三点の内の一点である。寿は天保の改革を行った老中・水野忠邦の側室で、天保三年（一八三二）に忠精を生み、忠邦没後に亮寿院と号した。

一六三点の内訳は、江戸末期の史料六点、明治期の歌合・詠草・句集など一四五点、明治期の書簡五点、包紙などその他七点である。江戸期の史料は本史料の他、忠精の成長記録「心おぼえ」、年中行事関係三点である。

当館では平成八年以前に、「水野家奥女中奉公細帳」<sup>1</sup>一綴、「山形藩水野家奥日記」<sup>2</sup>二冊を収集している。これらについては、筆者がすでに史料の性格、内容について分析を行っている（ここでは割愛するが、いずれも亮寿院に関するものである。従って、一六三点とこの二件は同じ所より出て、市場において分散したと推察できる。

元治元年（一八六四）、一四代將軍徳川家茂の二度目の上洛に、山形藩主・水野忠精は老中として随行した。忠精に供して上京した奥女中かもりは、水野家上屋敷（西丸下）で留守をしていた老女・千代山（奥向き総取締役）へ宛てて手紙を出した。本史料はその写しである。

「山形藩水野家奥日記」に、かもりの手紙について次の記載がある。

正月十九日西雲り雪

一京都表より正月十二日出御便り、御上屋鋪へ今日当着、かもりより手紙参り候事

このことから、手紙は上屋敷に届けられ、その後青山下屋敷にいた亮寿院の元に廻されたことがわかる。写しを作成したのが上屋敷の女中か、亮寿院付女中かは不明である。本史料は書状の形態をとっておらず、冊子にまとめられたものであることから、時間をおいて余人が作成したもので、かもりの手紙ではないといえる。

手紙は全部で一二通で、差出日・受取日・内容を一覧にしたのが左の表である。

番号	差出日	受取日	内容
〔1〕	1/9	1/16	浜御庭より乗船、船で京に向かう。下田で元旦。1/8大坂着。御座船で淀川を遊行、伏見上陸。忠精は一足先に入京し、会津二橋、関白に挨拶。
〔2〕	1/12	(1/19)	家茂入京出迎え。二条城宿泊の苦勞。
〔3〕	1/20	2/4	明日初参内(1/21)
〔4〕	1/20	2/4	明日再参内(1/27)。中川宮・春嶽・伊達などに会う。料理が口に合わないのかもり苦勞。
〔5〕	1/28	2/5	昨日参内(1/27)。江戸よりの手紙楽しみにしている。
〔6〕	1/29	2/5	お酒をよく飲む。明日東本願寺へ御成(2/12)。
〔7〕	2/11		江戸より食へ物届く。忠精は健康。四条芝居小屋で人が斬られる。
〔8〕	(3/6)		花盛り。忠精胸の痛み。3/7参内の詳細。
〔9〕	2/25		3/24参内、休息所にて饗応。3/28関白邸に御成、お菓子を頂戴し、かもりもいたたく。嵐山花盛り。
〔10〕	3/14		
〔11〕	4/11	4/22	
〔12〕	4/11	4/22	かもりの下宿は遠い。当方でもものは揃うので送らなくてよい。



(一) 推定 「一」 執筆日

これらの手紙は上洛中及び京都における忠精の様子（健康状態・苦勞・活躍の様など）を、江戸にいる人々、わけても生母亮寿院に伝えるために書かれたものといえる。それに加え、江戸から送ってほしい食べ物や京都土産のやりとりもしている。

かもりの手紙は早いときは五日で着いているが、遅いときは一〇日以上かかっている。江戸と京・大坂間は商人による定飛脚が発達し、書状・荷物・金子を四日から一〇日で運んでいた。正月一二日忠精は江戸表へ継飛脚を出した。継飛脚は幕府公用の飛脚で、老中・京都所司代・大坂城代などが利用できた。同日にかもりも手紙を出しているが、これは継飛脚へ乗せたのだろうか。

かもりが江戸屋敷の人に依頼した菜漬・らっきょう・海苔なども飛脚で運ばれた。手紙【5】で「飛脚にては大そうのうんちんゆへいたしかたなく」と運賃高価の感想を述べている。また、忠精が奥の便りを楽しみにしているの、表に頼んで便りが間遠にならないよう、注意を促している。

手紙【1】の冒頭に、昨年と違い上方の政情が穏やかであることを強調している。【7】でも「此地いたつて御せいひつ昨年とハもようも大きによろしく」と述べている。忠精は文久三年（一八〇六）の將軍上洛にも供奉しており、この時にもかもりが付いていったであろうことが窺える。同年の上洛では、足利將軍木像梟首事件が起こるなど不穏な様相で、攘夷実行を迫られ幕府は窮地に陥っていた。

その後、八・一八の政変がおこり、薩摩主導で参与会議が発足し、朝廷も幕府に攘夷を強要しないという姿勢になった。今回は將軍の上洛を歓迎するムードがあつたようだ。それでも人が斬られることが日常茶飯事に起きたようで、手紙【11】に「切るこやまず」とある。二月二四日に浪人でない者が二人斬られ、四月九日に芝居がはねたときに一人、その夜中に祇園町の番人が斬られたとある。

さて、家茂二度目の上洛は海上を行くことになり、文久三年二月二七日浜御庭より御召船翔鶴丸に乗り込み、忠精も同船した。手紙【1】によると上洛途中の家茂と忠精の宿と休憩所は、下田では家茂は海善寺、忠精は鳳福寺に泊まる。子浦では家茂は西林寺、忠精は中宿五郎兵衛宅に泊まり、紀州大嶋串本村では家茂は無量寺、忠精は漁師矢倉甚兵衛宅に泊まる。紀州由良河戸村に上陸すると、家茂は教専寺、忠精は吉田屋文右衛門宅で休息をとった。

正月八日には大坂天保山より川船にて安治川通船、備前島より上陸し、家茂は大坂城に入城した。翌九日、かもりは手紙【1】を大坂から出す。

正月一日、忠精は家茂より一足先に京都に向かい、入京後直ぐに京都守護職松平容保に会い、一橋慶喜の旅館（若狭小浜藩酒井家の京都藩邸若州屋敷）を訪ねる。翌一二日には関白二条斉敬、議奏・伝奏に上洛の挨拶に回る。手紙には忠精が会談、挨拶に赴いた人物が記されており、京都の政情を窺い知ることができる。日々諸大名と会談し進物も多くあつたようであるが、旅宿への帰りが遅くなりかもりは心配している。

正月一五日、忠精は伏見まで家茂を迎えに行く。家茂は伏見から行列を組んで京都に向かい途中伏見稻荷で休憩をとり、二条城に入ることが定められる。

老 中—酒井忠績・水野忠精・有馬道純（四月一日より稲葉正

邦）

若年寄—田沼意尊・稲葉正巳

忠精は二百畳敷きのところへ屏風を仕切にして寝ていたが、寒かったので紙の蚊帳を用いるようになったら暖かく、快適になったとある。家茂上洛時の二条城には本丸御殿はなく、二丸御殿のみであった。御車舎の近くに二百畳の空間があることから、ここに宿泊したのではないかと推察できる。

正月二五日、忠精は中川宮を訪ねた後、泊まりのため二条城に戻る。そこへ松平春嶽・有馬慶頼・伊達宗城が訪ねてくる。互いに酌をしあいうち解けた雰囲気であった、と忠精自らかもりに話している。

三月二八日、関白二条邸御成の供奉をし、饗応を受ける。家茂、忠精以外のメンバーは徳川慶勝・一橋慶喜・松平直克（政治総裁職）・酒井忠績（老中）・若年寄（氏名不明）・跡部良弼（御側御用取次）で、座順をかもりは手紙【11】で示している。蒸し菓子や干菓子を山のように頂き、そのお下がりをかもり始め御供の人々も頂戴した。飾り付けも美麗で、江戸で留守をしている人たちにも見せたく、味合わせたかったと記している。

在京中の將軍の参内は『丕揚録』<sup>3)</sup>によると九回あり、その全部に忠精は供奉している。

①正月二一日 家茂、右大臣昇任答札の参内。孝明天皇から宸翰「無謀の攘夷は朕の好むところではない、参与会議のメンバーと力を合わせ衰勢を挽回せよ」を受け取る。

②正月二七日 再度天皇より宸翰「参勤交代制を緩め諸大名に武備の充実を図らせた政策を評価、長州は罰しなくては成らない」を賜る。

③二月一四日 一月二七日の宸翰に対し、「攘夷の叡慮を守り、海岸防備・横浜鎖港を行う」という奉答書を提出する。

④三月七日 万石以上諸大名参内する。家茂、小御所において天皇に拝謁する。

⑤三月九日 舞楽拝見のため参内、禁中で料理あり。

三月一二日忠精、三所物（刀剣の付属品の目貫・筭・小刀柄）、柄鮫を朝廷より賜る。

⑥三月二四日 参内、休息所にて饗応あり。

三月二五日忠精、短刀・鏢（赤銅地葵唐草金象眼）を朝廷より賜る。

⑦三月二九日 臨時参内する。

⑧四月二九日 臨時参内する。

⑨五月二日 家茂の暇乞いの参内、太刀を拝領する。

かもりは一月二七日と三月七日の参内について手紙【5】【6】【11】に記している。二七日忠精は参内準備のため五ツ時には出か

けたが、何か急用ができ将軍が施薬院に入ったのは四ツ時であった。昼九ツ時に参内し、忠精が旅宿に戻ったのは夜九ツ時であった。

施薬院は御所前の控え所で、将軍が参内の際に衣服を改める場所となっていた。会津藩主松平容保が宿舎として当初利用していたが、将軍の上洛に際し明け渡した。忠精は旅宿で着替え施薬院に入り、装束所紅屋で着替えたり、着替え後いったん登城したり、区々である。

三月七日、在京の諸大名に衣冠着用で参内することが触れられた。忠精は旅宿で衣冠に着替え登城する。二条城から行列を組み施薬院に入り少し待機し、案内に従い再度行列を組み御所へ向かい、唐門車寄前で家茂は下輿し、忠精らは平伏する。その様を京市民や上洛に供奉した者たち、及びかき見物した。普段着慣れない衣装である衣冠のせい、三〇人いる諸大名の内美しいのは榊原政敬と井伊直憲といった若い人たちだけで、他の殿様はみられたものではない、と手紙【10】でもかき見物している。もちろん、忠精については「市村の天神様のようにご立派」と絶賛している。ちなみにこの時忠精は三三歳である。

歩兵頭として上洛の御供をした藤沢志摩守次謙は、上洛日記「羈窓日録」を記し、三月七日参内の模様を描いている。それによると、行列と見物人の距離は意外と近く、ささやき合っている女性が描かれている。

五月二〇日、家茂は江戸に帰還するが、忠精は引き続き滞京を命じられる。六月五日夜に池田屋騒動が起こる。忠精は六月六日に京

都を發ち大坂に着き、八日に出帆の予定を一日遅らし、九日出船となる。一一日忠精は、水野家の江戸上屋敷に戻る。

上洛に奥女中を連れて行ったことは、先行研究でもふれられていない。手紙から奥女中に関する記事を拾ってみよう。手紙【8】によると忠精は娘の土産に内裏雛一对と三人官女を購入するが、官女の顔がよかつたので、そのような女性を御側に召し抱えておくよう命じている。

よく奥女中は歌舞伎見物が好きであったといわれるが、かき見物江戸の芝居には通じていたらしく、忙中間を見つけ四条などに芝居見物に出かけている。しかし、上方は役者の顔もわからず、男性の家臣は話し相手に成らず面白くないと感想を述べている。また、嵐山の花見にも出かけ賑やかな様子を伝えている。

忠精が上京に際し連れて行った奥女中は文面より、かき見物一人と思われる。男性の家臣は、岩崎彦右衛門（家老）・値賀七左衛門（家老）・村田蟹守（奥付）・近藤雄依・青山力之助・杉原善右衛門・清水周伯（医師・奥坊主）、他に名字は不明であるが平学・仲・亦三郎三人と小姓二人が随行了ることが、手紙よりわかる。

最後に、本史料の書き手かき見物について若干の考察を加えておこう。天保三年（一八三二）から慶応元年（一八六五）までの奥女中の経歴を記した「水野家奥女中奉公細帳」にかき見物の名前がないため、職制は判明しない。しかし、手紙【8】に「永く女なき御旅ちう」とあることから側室ではない。京都の夜道を、忠精の旅館から自分の宿まで戻っている「朝夕御そはははなれ不申候へとも、下宿

壹里半はかり有之、御いびをうか、ひ退出仕候程、遠くこまりまいらせ候」ことから、度胸のある年配の女性と考えられる。

これらのことや、文中で重臣を呼び捨てにしたり、忠精の食事の好みや体質などを把握していることから、かもりは老女に次ぐ立場で、忠精の扶育にかかわった者ではないか、と思われる。

〔註〕

\*1 拙稿「奥女中奉公について」（『東京都江戸東京博物館研究報

告』第三号）

\*2 拙稿「山形藩水野家奥日記」（『東京都江戸東京博物館研究報

告』第五号）

\*3 『丕揚録・公德辨・藩秘録』（『日本史料選書』7 近藤出版社、

一九七一年）

\*4 『水野忠精 幕末老中日記』第七卷（ゆまに書房、一九九九年）

\*5 『羈窓日録』（『幕末・維新の相模原』相模原市立博物館、二〇〇〇

年）

\*6 『稲葉美濃守書状』（東京都立大学所蔵、水野家文書の内）

\*7 忠精の旅宿については管見の範囲では判明しなかった。かもりの手紙でそれと思われる所としては、油小路六角西へ入る亀屋か宝福寺が考えられる。市中の賑やかなところにあつたという一文を加味すれば、亀屋の可能性が高くなるが、一般には寺を旅宿に充てるが多かった。